

研究プロジェクト

記譜プロジェクト「未完の記譜法」

2019年度活動報告

展覧会「聞こえないを聴く・見えないを視る」レポート

2019年10月24日（木）-11月10日（日） 崇仁地域周辺

先日、ロンドン大学ゴールドスミス校を拠点に活動するフォレンジック・アーキテクチャーのプレゼンテーションに接する幸運に恵まれた。フォレンジックとは科学捜査を指す言葉で、建築家、法律家、プログラマー、デザイナーなど異なる領域の専門家からなる調査集団がフォレンジック・アーキテクチャーである。彼らは、世界各地で発生している紛争、メディアや政府によって歪曲された犯罪についてデジタル・テクノロジーを駆使して調査し、対抗的な証拠をさまざまな場で公にすることで政治化する。その独自の方法のなかでも特に注目したのは、シリアの首都ダマスカス郊外のセイドナヤ刑務所における調査手法だった。刑務所に収監された人たちは、視覚情報を完全に遮断された暗闇での数ヶ月を過ごす。見るだけでなく互いに話をするのも禁じられた中で、自分達がおかれた状況やこれから迫りくるかもしれない事態をとらえるために、収監者たちにできるのは闇の空間へ向けてじっと耳をすますことだけ。監視員の近づいてくる足音、建物内での反響音、かすかに聞こえる拷問によるうめき。これら音だけからなる記憶をてがかりに、フォレンジック・アーキテクチャーのメンバー達は、元収監者たちと協同でセイドナヤ刑務所の三次元モデルを再構築していった。Situating testimony というこの手法により、元収監者たちは細部に渡る記憶を再構成してゆくが、心理的なトラウマがあまりに強い場合、間違った記憶イメージが述べられる場合がある。たとえば直列しているはずの独房群が、円環状に配置されていたというように。フォレンジック・アーキテクチャーによれば、客観的な記述だけを証拠とする事に意味があるのではなく、この場合、歪んだ知覚として記述される事で当事者の極限の精神状態を明示する証拠となるという。

さて、「聞こえないを聴く・見えないを視る」事業の初年度は「CASE-1 霧の街のアーカイブ」というコンセプトでプロジェクトを進めた。「霧の街」とは人口減少、災害、紛争などでコミュニティーの環境や生活の遺産が消えつつある状況をさすが、本事業では地域のドキュメントを映像や言葉ではなく身体感覚や音という環境記憶の背景に着目した記録法の可能性を探った。そのためサウンドアーティストの鈴木昭男氏と共に、京都市立芸術大学の移転を前に変貌を遂げる崇仁地域でのフィールドワークを重ね、身体に作用する複数の音のポイントを示す地図を作成した。この地図は紙に印刷したものと、スマートフォンで閲覧できるウェブ上のものがあり、プロジェクトが終了した後も、地図を片手に街の環境の変化を捉えることができる。さらにガイドツアー、展覧会、シンポジウムへと複数の角度からこのプロジェクトを検証する方向へと展開していった。現代の社会では、SNSや情報を通じて情動を刺激し行為を誘導するマーケティング戦略や公共空間で人の振る舞いを管理する不可視の力が拡散している。スリープモードの携帯電話に象徴される「常時ON」状態でつながりつづける時間の流れに対して、鈴木昭男氏の「日向ぼっこ」でぼうっとする技芸は、身体環境や時間の伏流から考え直す端緒をひらく。悪意に満ちた管理コントロールの下で息をひそめ、暗闇にじっと耳をすますセイドナヤ刑務所の人々と「日向ぼっこ」の空間を等価に重ね合わせるとき、私達は「聞こえない・見えない」記憶イメージへと導かれることになる。必ずしもそれらは幸福な記憶だけでないにしても。

高橋 悟（美術学部教授）



* なお「点音マップin Kyoto（崇仁）」のGPSマップは左のQRコードからアクセスできます。